

27万回の男

佐野 浩（編集長）

ご存知、寅さんが失恋男をなぐさめて言う。
「世のなか、半分は男、残りは女じゃねえか。
くよくよすんな」

世界人口は 60 億人あまり、30 億人は女性という計算になる。寅さんではないが、よりどりみどりと、とも言えようが、そう簡単でないのが恋の病。

それはさておき、そんなに多い男女だから、修飾用の枕詞も多様である。「静かな男」、「リオの男」、「仮面の男」、「知りすぎた男」、「ダーウィンに消された男」、なんとなく殺風景である。それに比べると、女性の場合「幻の女」、「砂の女」、「炎の女」、「金魚を飼う女」、艶めいている。「鉄の女」なんてすごい人もいられるけど。やはり、古今東西、女性は万物の源とみなされたせい、などとぼんやり、本を眺めていたら「最も引用された男」というのが目についた。これは看過できないぞ、と目がさめた。

その男の名はオリバー・ローリー (1910-1996)。1942 年、ローリーは病気の子供たちの診断のために、微量血液からビタミンを定量する方法を探っていた。その過程でフェノール法に基づく蛋白質の微量定量法（いわゆるローリー法）を確立した。はじめは論文にする気もなく、誰にでもプロトコルを提供していた。そのうち「unpublished method of Lawry」といちいち書くのは面倒だ、と多くの仲間から指摘され、*J. Biol. Chem.* に投稿したが、あっけなく却下。結局、おおはばに短縮して 1951 年に同じ *JBC* に発表した

(193 巻 265 頁)。以来、2004 年までの 54 年間に、275,669 回、引用されたという。平均すれば、1 年に 5000 回になる。

研究者の業績を測るてだてとして、インパクトファクターが利用されることは、以前、このコラムで書いた (22 巻 2 号)。投稿論文が掲載された雑誌のインパクトファクターを総計して、この人は何点、などと数値化し、研究評価や採用人事を決めることもあった。全く無意味な数字なのは、カロリー計算から健康度をわりだすようなものだが、それがひとり歩きしているのが恐ろしい。さすがに、事情を知る人はその弊害を承知しており、代替案というほどでもないが、被引用回数 (citation) のほうがまだしも我慢できる、という。ある論文が一定期間中にどのくらい引用されたか、ということで「いろいろな人が読むのだから、いい研究なんだろう」と想像を交えた評価である。これもまたランクづけの対象になっている。例えば、生化学とか植物科学とか、分野別の世界のトップ 100 人というようなデータが時どき発表される。

問題はそうした資料をもとに、マスコミなどが「被引用度が高ければ高いほど、優れた研究者」と短絡的に報道し、社会も、大学も、当の研究者もそう信じてしまうことである。それがいかに的外れであるか、ちょっと考えればすぐに分る。例えば、1951 年にコールドスプリングハーバー・シンポジウム報告にのったマクリントックの論文 (トランスポゾンの発見、後年ノーベル賞を受賞) は完全に無

視されたというから、被引用度はほとんどゼロだったろう(少なくともその頃は)。同年発表の上記、ローリーの論文は年に5000回である。前者は自然の法則の発見であり、後者は科学方法論だから、同列には論じられないことは明らかである。被引用度だけで研究、あるいは研究者の価値を判断することの不合理はこの一事からもよく分る。それではどんな評価法があるのか、と聞き直られても困るのだが、研究者としては「優れた論文なら、いずれ必ず日の目を見る」と信ずるのが一番のように思う。ヒトはなぜ論文を書くのか、という根源的な問いはさておいて、だが。

*

Plant Biotechnology 掲載論文が2005年中にどのくらい引用されたか調べた(Web of Science)。2003年発行分(20巻)では全部で36回、2004年分(21巻)では17回であった。総論文数は2003年が50報、2004年が89報だから、2003年には70%、2004年には20%の掲載論文が2005年に引用されたことになる。ただ、2003年分には重複があり、Yoshihara et al. (20巻33ページ)の論文が6回も引用されている。論文数としては1報とカウントすると、2003年の被引用論文は60%となる。つまり、掲載された論文の半分近くが、一度も引用されなかったことが分る。2004年にいたっては、5報のうち4報が次の年には引用されていない。

これは編集側からみると、いささか奇異の感をまねがれない。科学研究はたいていの場合、連続しており、論文はその一区切りとして発表することが多いと思う。とすれば、2年もたてば、本誌掲載論文の続編がどこかの雑誌に発表されるはずである。その論文には前報として本誌論文が引用されるのが普通で

あろう。他人が引用するかしないか、はマクリントクやローリーの例を持ちだすまでもなく、その時の趨勢によるから、無視できる。しかし、書きっぱなしで後続研究なし、というのでは、著者自らがその論文価値をさして認めていないことになりはすまいか。編集者としては、なにがなし情けない思いがしないでもない。

本誌についてインパクトファクター(IF)論議はまだ続いている。投稿する以上、IFのある雑誌が望ましい、という意見がおおい。そこで、上記データを利用して私家版IFを計算してみた。2005年は0.3884となった。「できるだけ多く引用してIFをあげてください」と世界中の雑誌がひそかに運動しているといわれる。度がすぎて「他誌は引用するな」といった連絡が明るみにでて、裁判沙汰になった話も聞く。そんなIFにどれほどの意味があるか、と前から異議を唱えているのだが、それとは別に、本誌の投稿者には自分の論文を大切にしてもらいたい、とは思う。全著者が2年くらいのうちに1度、引用すれば、計算上IFは1になる。森川前学会長が「いい雑誌を作っていれば、IFなんか黙っていてもついてきます」といわれたのは、たぶん、こういうことを指したのだろう。

*

2002年のノーベル賞は、mRNAの発見などの功績によってSidney Brenner教授に授与された。私としては、おもしろい一言の先生としての印象がつよい。「年間2メートルもの論文を誰が読むか(JBCのこと)」とか。「きみたち、XeroxはやめてBrainoxしなさい」ハーバード大学での講演のひとつ。コピーをとる時、今でもよく思い出す。